

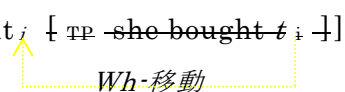
能の違いから、各々異なった構文であることを指摘し、TWQは日本語でもWh-移動が適用される構文であること、日英語の違いは統語構造における語用機能の反映のあり方に求められることを論じる。

2. Sluicing 構文の特徴と分析

2.1 英語の Sluicing 構文

上記でも簡単に触れたが、英語では Sluicing 構文は、対応する疑問文から TP が省略された構造と考えられ、(1a)は(3)で示したように、疑問詞が Wh-移動により文頭に移動し、残りの TP が先行する文との「同一性」により省略されると分析できる。

(3) [TP Mary bought something] but I don't know [CP what_i [_{TP} she bought t_i]]



この Wh-移動分析で大きな問題となるのは、Ross (1969)以来指摘されているが、Sluicing 構文が「島の制約」違反を許すという事実である。以下は Merchant (2001)からの引用であるが、対応する非文法的な(b)の文から分かるように、(4a)は関係節から、(5a)は副詞節から、(6a)は名詞句から「島の制約」を無視して Wh-句が移動したと思われる例である。

(4) a. They want to hire someone who speaks a Balkan language, but I don't remember **which**.

b. *I don't remember **which** (~~Balkan language~~) they want to hire someone [~~who speaks ___~~]. (Merchant 2001:114)

(5) a. Ben will be mad if Abby talks to one of the teachers, but she couldn't remember **which**.

b. *Ben will be mad if Abby talks to one of the teachers, but she couldn't remember **which** (~~of the teachers~~) Ben will be mad [~~if Abby talks to ___~~]. (Merchant 2001:114)

(6) a. She bought a big car but I don't know **how big**. (Merchant 2001: 176)

b. *I don't know **how big** she bought [~~a ___ car~~].

こうした例の存在から、Sluicing を「統語部門での省略」ではなく「LF でのコピー」により分析するとの案もある。しかし、(7)のような文の存在は、単純な「省略」対「コピー」の論争では決着がつかないことを示している。

(7) a. They said they wanted hire Abby_i, but she_i didn't know **why**. (***why** they

- wanted hire Abby_i. / **why** they wanted hire her_i.) (Merchant 2001: 191)
- b. The report details what IBM did and **why**. (***why** IBM did *t* / **why** IBM did it) (Merchant 2001: 203)
- c. Abby was reading, but I don't know **what**. (***what** Abby was reading \emptyset) (Merchant 2001: 19)

本稿では、詳細は割愛するが、基本的にはMerchant (2001)に従い、英語のSluicingは、(3)で示したように、Wh-移動後のTPが削除された構造と考える。しかし、削除操作の前提とされる「同一性」については、(7)のような例を考慮すると、先行文との「意味的整合性」の観点から検討されるべきと考える。そして、(4)~(6)のような「島の制約」違反の文については、想定される「省略された文」には「島」のない文（例えば(4a)なら、I don't remember **which (Balkan language) he speaks**.のような文）からの派生と考える。つまり、Sluicingは、(3)で提示したように、通常の疑問詞疑問文同様、CP指定部へWh-句が移動し、CPの補部のTPが先行文との意味的整合性により省略された、と仮定する。その省略の条件については、ここでは、(3)のように明らかな構造的統同一性のある場合も含め、(4)~(7)にも対応できる「意味的整合性」とだけ述べるに止める。³

2.2 日本語の Sluicing 構文：Wh-移動分析と Cleft 分析

さて、日本語の Sluicing 構文だが、Takahashi (1994)以来、(5)に太字で示したような E-Sluicing 構文がその考察の対象となってきた。

- (8) a. 花子がお何かを買ってきたが、**何をか** 分からない。
 b. 誰かが入ってきたけど、**誰がか** 分かる？

そして、その分析には、(8a)を例にとるが、(9a)のような（英語の(3)と同様の）Wh-移動分析と(9b)に示したCleft分析の2通りがこれまで提示されてきた。⁴

- (9) [CP [TP 花子がお何かを買ってきた] が]
 a. [(私は) [CP 何を { TP 花子が ~~t~~ 買った } か]分からない] (cf. Takahashi 1994)
 ↑
 Wh-移動
 b. [(私は) [CP [TP 何を { TP 花子が ~~t~~ 買った } の(だ)]か]分からない]
 ↑
 Focus または Scrambling 移動
 (cf. Fukaya and Hoji 1999, Hiraiwa and Ishihara 2002, Kuwabara 1996 ; Hasegawa 1997, Koizumi 1995, etc.)

詳しくは、上記の先行研究に譲るが、日本語の Sluicing には(9b)の Cleft 分析の方が分があると思われる。その最大の理由は、以下の(10)~(14)の例文から分かるように、

Sluicing が次の点において、Cleft 構文と基本的に同様の振る舞いをする点にある。(i) 繫辞の「だ」が可能であり、(ii)格標示のあるものとないものの2つのタイプがあり、(iii) 格標示のあるものは「島の制約」に従うが、格標示のないものは「島の制約」違反を許す。こうした類似性は、Sluicing と Cleft 構文が(9b)の構造をその派生において共有していると仮定すれば説明できるのである。

- (10) a. 花子を買ってきたのは**本(を) 3冊**だ。
b. 花子が何かを買ってきたが、**(を) (だ) か** 分からない。
- (11) a. 花子が [太郎が花束を贈った女性] を探している。
b. [花子が [太郎が *e* 贈った女性] を探しているのは] **バラの花束(*を)** だ。
c. 花子は [太郎が何かを贈った女性] を探しているらしいが、
僕は**何(*を)(だ)か** 分からない。
- (12) a. 太郎がケーキを食べたから花子が怒った。
b. 太郎が *e* 食べたから、花子が怒ったのは**そのケーキ(*を)** だ。
c. 太郎が何かを食べたから、花子が怒ったが、私には**何(*を)(だ)か** 分からない。
- (13) a. 花子が大きな車を買った。
b. *花子が *e* 車を買ったのは**大きな** です。
c. *花子が車を買ったらしいが、私は**どんなか** 興味ない。⁵
- (14) a. 4月から文学部の教授が着任する。
b. *4月から *e* 教授が着任するのは**文学部の** です。
c. *4月からどこかの学部の教授が着任するらしいが、**どの学部のか** 知りたい。

特に、(iii)の「島の制約」に関わる事実から、格標示付きの Cleft 構文および Sluicing は移動により派生されると考えられる。

ここで注意しておきたいのは、日本語も英語も Sluicing の派生には同じく「移動」が関わるが、英語の場合は Wh-移動であり、日本語の場合は Focus なり Scrambling なりの移動であって、Wh-句が CP の指定部へ移動しているのではないことである。日本語の場合、補文の疑問文機能は CP 主要部の補文標示「か」が担っていることから、統語部門で（可視的に）Wh-移動が適用する必要はないのである。

ここで、英語の Sluicing と日本語の E-Sluicing の違いを整理しておく。次節では、こうした違いを踏まえ、日本語の主文としての Sluicing (TWQ) を考察する。

- (15) a. 英語の Sluicing には Wh-移動に関わり、Wh-句が CP 指定部に移動することで間接疑問文としての機能が表示される。他方、日本語の Sluicing に関わる移動は Wh-移動ではなく、間接疑問文の機能は補文標示「か」により標示さ

れる。

- b. 英語の Sluicing 構文は、(外見上)「島の制約」違反を許すが、日本語の Sluicing は「島の制約」に従う。

3. 日本語の短縮疑問詞疑問文 (TWQ)

英語の場合、(15)の一般化は E-Sluicing(1)と TWQ(2)の両方にあてはまり、紙幅の関係上例文は省くが、TWQ でも「島の制約」違反 (i.e.,(4)~(6)に示した E-Sluicing に対応する TWQ) は許される。一方、日本語の場合は、E-Sluicing と TWQ は構造的にも明らかな違いが観察できる。(16)は TWQ の例である。

- (16) a. A: 花子がおかを買ってきたよ。 B: 本当? 何を(*か)? ↓ ↗
b. A: 誰かが入ってきたね。 B: えっ? 誰が(*か)? ↓ ↗

TWQ は疑問文であるにもかかわらず、E-Sluicing と異なり、疑問文標示の「か」が使えない。さらに興味深いことに、日本語の TWQ は、英語の E-Sluicing や TWQ 同様 (しかし日本語の E-Sluicing とは異なり) 「島の制約」違反を許す。(17)は、(11)~(14)の非文法的な E-Sluicing の例と対応している TWQ の例であるが、全て、文法的である。

- (17) a. A: 花子は [太郎が何かを贈った女性] を探しているらしいよ。
B: 本当? 何を?
b. A: 太郎が何かを全部食べちゃったから花子が怒ったらしいよ。
B: 本当? 何を?
c. A: 花子が車を買ったらしいよ。 B: えっ? どんな?
d. A: 4月から教授が着任するらしいね。 B: えっ? どの学部の?

さらに、注目すべきは、TWQの音調である。一般的に日本語では疑問文は、Yes-No 疑問文であれ疑問詞疑問文であれ、語尾が上昇する音調となる。しかし、TWQにおいては、(16)に矢印で示したが、語尾を上昇させない音調も許される。⁶ ちなみに、この下降音調と主要部で疑問文を標示しないという2つの特徴は、英語のTWQでも観察できる。

⁷ (cf. Lasnik 2001)

- (18) a. A: Mary bought something. B: Really? What (*did)? *↗
b. A: John lost his wallet. B: Really? {Where/When}(* did)? *↗

つまり、日本語の TWQ は、E-Sluicing とは異なり、英語の Sluicing と同様の振る舞いを示す。この事実は、次の2つのことを示唆していよう：(i) TWQ と E-Sluicing は別物であること；(ii) 日本語の TWQ は英語の Sluicing (TWQ および E-Sluicing) 同様、Wh-移動により派生されること。次節で、この2点についてさらに考察する。

4. 分析と発展：統語構造と語用機能

4.1 TWQ と Wh-移動

上記の(ii)「日本語の TWQ には Wh-移動が関わる」は、日本語の TWQ が英語の Sluicing とほぼ同じ振る舞いを示すことからの帰結である。そして実際、この結論が正しいことを示す経験的事実が、「移動の島」内部に疑問詞が現れる構文で観察できる。先ず、(19)の疑問文とその答え方を見てみよう。

- (19) a. 社長は [誰が推薦した] 学生を採用したがついていますか?
b. 山田教授が推薦した学生です。
c. *?山田教授です。

(19a)では、疑問詞が関係節内に現れている。そして、その答えは(19b)のように関係節を含む「島全体」を用いて答えるなら文法的であるが、疑問詞のみの値を答える(19c)は明らかに容認度が落ちる。この現象は、LF での Wh-移動も統語的には、「島の制約」に従うこと、また、(19a)のような疑問文は、意味的には、疑問詞のみの値を求める疑問文ではなく、疑問詞の値から島全体の名詞句の値を求める疑問文であることを仮定すれば説明できる (cf. Hasegawa 1986, Nishigauchi 1990)。疑問詞疑問文では、求められる値に対応する要素が CP 指定部に Wh-移動により移動する。この移動は、日本語では LF で起こる。さて、(19a)だが、求めるのは「学生」の値、つまり「島」全体であるから、CP 指定部には「島」全体が移動する筈である。しかし、島の主要部 (学生) 自体は Wh-句ではないので、島全体を Wh-句として機能させるには、Wh-素性を持つ「誰が」が LF において島の指定部 (DP 指定部) に移動し、それが Pied-Piper として島全体に Wh-素性を持たせる必要がある。つまり、(19)の現象は、LF での Wh-移動が前提としてあってはじめて観察されるものなのである。

これを踏まえ、E-Sluicing の(20a)(20b)と TWQ の(20c)(20d)を見てみよう。

- (20) 社長は [誰かが推薦した学生] を採用したがついているらしい。
a. でも、私は [誰が推薦した学生] を か 知らない。
b. *でも、私は 誰が か 知らない。
c. *えっ? [誰が推薦した学生] を?
d. えっ? 誰が?

E-Sluicing の場合は、島全体を用いた(20a)が許されるが、これは(19b)と事情は同じで、(19b)で示した E-Sluicing の分析に従っていることから予測されることである。そして、(20b)の非文法性は、(11)(19c)と同様、疑問詞のみを島から移動させることはできないことから説明できる。

さて、TWQだが、E-Sluicingとは対照的に、疑問詞のみで作られた(20d)は文法的だが、島全体を用いての(20c)は非文法的である。この事実は、TWQにはWh-移動が関わっていると上記の分析で説明できる。(19a)との関連で述べたように、島全体が疑問詞として機能するためには、島内部でWh-句がPied-Piperとして島の指定部に移動しなくてはならない。しかし、その移動はLFでしか起こらない。そして、(20c)が非文法的であるということは、TWQ派生時には島自体は疑問詞としては機能できていない、つまり、LFでのWh-移動を必要とする島の構造を持つ名詞句ではTWQは作れないことを示している。それに対し、文法的なTWQ (20d)は、Wh-句自体がCP指定部に可視的に移動している。すなわち、TWQは可視的なWh-移動が必要であるが故に、島全体を用いた(20c)は許されないのである。⁸

ちなみに、上記の可視的 Wh-移動による TWQ の分析は、(16)(18)で観察した CP 主要部に「か」（および英語の場合は T を含む助動詞）が許されないという事実の説明をも可能にする。一般に、語用的機能を持つ文（Clause Typing）については以下の一般化が成立する（cf. Cheng 1991, Rizzi 1997, Hasegawa 2005）。

(21) Clause Typingの統語的具現

- a. 疑問文などの「文の語用的機能」は、その機能と関わる範疇の指定部もしくは主要部で形態（音韻）的に明示されなければならない。すなわち、疑問詞疑問文は、指定部に特定要素を持つ（Wh-移動が適用される）か、主要部に特定の形態的要素（e.g. 「か」）が生起しなくてはならないのである。
- b. 同じ機能は（経済性により）指定部と主要部の両方で明示する必要はない。⁹

(16)や(18)で C の主要部に「か」や助動詞が生起できないという事実は、CP 指定部に Wh-句が存在することで疑問詞疑問文の機能が満たされている、つまり、Wh-移動が起こっていることを示しているのである。

また、TWQ に Wh-移動が常に必要であることは、TWQ の語用的機能を考慮すれば当然のことであると思われる。TWQ というのは、最も「省エネ」で疑問詞疑問文の機能を発揮する構文である。疑問文の機能は CP に明示されるわけであるから、CP のみで疑問詞疑問文の機能を満たすことができているから TP が不要となっているのであろう。しかし、例え、疑問補文標示「か」を用いても、CP 主要部だけでは求める値（すなわち、疑問詞の情報）は示すことができない。結果として、CP だけで疑問詞の情報を確保するためには、Wh-移動を適用せざるを得ないのである。

4.2 強調文としての E-Sluicing

それでは、何故、日本語の E-Sluicing は Wh-移動を用いないのであろうか？ここで、E-Sluicing の語用的機能は TWQ のそれとは異なることに注目したい。TWQ は上述し

たように、語用的に正真正銘の疑問文であるが、**E-Sluicing** は、必ずしも常に疑問文として機能しているわけではない。実際、疑問文を用いた「強調文」としての **E-Sluicing** も見られる。例えば、(8b)の「誰かが入ってきたけど、**誰がか** 分かる？」という文は、強調文 (i.e., 話者は「誰が」の値を保持しているが、聞き手にその値を想像させる文) として解釈することも可能である。これに対し、(16b)の **TWQ** 「えっ？**誰が**？」は、話者がその値を求めている状況でしか使われない。この事実は、日本語では、**TWQ** は **Wh**-移動を伴うが、**E-Sluicing** は強調構文の **Cleft** 文と共有できる構造から派生されるという本論文の結論を語用的な観点から支持するものであろう。統語構造と語用的機能は必ずしも常に対応するわけではないが、日本語においては、**TWQ** と **E-Sluicing** はそれぞれ疑問文と強調文として別の構造を持っていると言えるだろう。ただ、強調のためでも「間接疑問文」形式を用いることから、英語の場合は、必然的にその対応が見えにくくなってしまっているのである。日本語では、強調のための疑問文 (**E-Sluicing**) は **C** 主要部の「か」により明示されるために **Wh**-移動は必要なく、**Cleft** 構文と同様の操作の適用を受けるだけである。しかし、**TWQ** はその機能としても疑問文であり、**TP** が省略される **TWQ** 構造では、必然的に **Wh**-移動が適用されるのである。つまり、日本語は、疑問文に「か」を用いるから **Wh**-移動が認められないと考えられてきたが、**TWQ** のように強い語用的要請があれば、**Wh**-移動は適用されるのである。以下は本論文のまとめである。

- (22) a. **Sluicing** と呼ばれる構文は、**E-Sluicing** と **TWQ** の2つのタイプがあり、この2つは語用的に異なり、構造的にも異なる可能性がある。
- b. **E-Sluicing**: 統語構造上は間接疑問文だが、語用的には疑問詞疑問文ではなく、強調構文である。統語上の疑問標示は、上位述語からの補文選択指定によるが、その選択指定は、英語では **CP** 指定部への **Wh**-移動により、日本語では **CP** 主要部の「か」により満足させられるので、日本語では **Wh**-移動は必要ない。
- c. **TWQ**: 統語構造上も語用的にも疑問詞疑問文であるが、「文が疑問文であること」および「疑問詞で表される要素を問うこと」を、最も「省エネ」の構造で表す構文である——**TWQ** は疑問文であることを示す **CP** のみで成り立ち、**TP** は省略される。そのためには、疑問詞は日本語でも **CP** 指定部への移動する必要がある、同時に、(21)に従い、**CP** 主要部の形態音韻的標示は不要となる。つまり、「か」は許されない。
- c. 日本語:**Sluicing** は強調構文 → 強調構文の **Cleft** 文と共通の構造を用いる。
TWQ は疑問文 → **Wh**-疑問文としての **CP** 構造を持つ。
- d. 英語: **Sluicing**、**TWQ** とともに統語構造的には **Wh**-移動構文を用いる。

注

* 本論文は日本英語学会第24回大会での口頭発表に修正を加えたものであり、会場の方々からは有意義なコメントをいただいた。また、この論文の内容は、神田外語大学の大学院ゼミで扱い、筆者の2004-05年のMITでの在外研究時に、多くの方々（特に、Noam Chomsky氏、James Huang氏、加藤幸子氏、Howard Lasnik氏、高橋将一氏）と討議できたことは幸いであった。本稿は、長谷川(2006)の発展版であるが、分析や現象など、細部では異なるものとなっている。本稿の研究の一部は学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)（課題番号14380119）の助成を受けた。

1 英語のSluicingについての考察は、Ross (1969)、Chung, Ladusaw, and McCloskey (1995)、Lasnik (2001)、Merchant (2001, 2006)など数多い。

2 主文としてのSluicing (TWQ) をLasnik (2001)はMatrix Sluicingと呼んでいる。

3 「意味的整合性」についてはMerchant (2001)を参照。

4 ここでCleft分析とした分析(9b)は、細部では研究者により異なったメカニズムが想定されている。(9b)自体は、Cleft構文に至る前段階の構造で、Cleft構文は、(9b)からTPが(i)の文頭へ移動し格(「が」もしくは「は」)を伴うことで作られる(cf. Hasegawa 1997)。Sluicingが実際に、(i)のようなCleft構文から派生されるか、その前段階の(9b)の構造から派生されるかについては、ここでは論じない。

(i) ~~↑_{TP} 花子が~~ ~~t~~ ~~買って来た~~の_i ~~-(が)~~ [CP [TP何を t_i (だ)]か]…

5 (13)は、名詞句の修飾部のみを移動した例あり、(13c)と似ている(i)は文法的であるが、名詞の修飾語に「の」格（または、代用名詞の「の」）を伴うことから、全体として名詞句と分析でき、「島の制約」違反の例とはならない。

(i) 花子が車を買ったらしいが、私はどんなの(だ)か興味ない。

6 ちなみに、(16)のTWQと対応する復元形は、(i)から分かるように、「か」を使わない下降音調は非文法的であり、(16)のTWQとは対照的である。長谷川(2006)参照。

(i) a. B: 本当? *何を買いました。↘

b. B: えっ? *誰が入ってきました。↘

7 英語の場合は、疑問詞疑問文の音調はYes-No疑問文と異なり、短縮形でなくとも下降音調であり、上昇音調ではEcho疑問文としてしか解釈できない。

8 英語の(4)~(6)の例と同様に、(20d)でもWh-句の移動は「島の制約」を違反して作られたものではないと思われる。このTWQは「えっ? 誰が ~~[(その学生を)推薦したの]~~」というような文からの派生であろう。

9 英語の疑問詞疑問文では、疑問詞のCP指定部への移動と同時にCの主要部もT要素の存在により明示されている。このことは一見(21b)に反するよう見えるが、英語でのT要素のCへの移動は主文が疑問文の時に限られる。また、同様の倒置は、否定辞や条件節にも起こる。つまり、Cを占めるT要素は必ずしも疑問詞疑問文の機能を示しているわけではなく、(21b)の反例とはならないと思われる。

参考文献

Cheng, Lisa Lai-Shen (1991) *On the Typology of Wh-Questions*, Doctoral dissertation, MIT.

Chung, Sandra, William Ladusaw, and James McCloskey (1995) "Sluicing and

- Logical Form.” *Natural Language Semantics* 3, 239-82.
- Fukaya, Teruhiko and Hajime Hoji (1999) “Stripping and Sluicing in Japanese and Some Implications,” *West Coast Conference on Formal Linguistics* 18, 145-158.
- Hasegawa, Nobuko (1986) “More Arguments for the Pied-Piping Analysis of Wh-Questions in Japanese,” *Oriental Linguistics*, ed. by Nobuko Hasegawa and Yoshihisa Kitagawa, *University of Massachusetts Occasional Papers in Linguistics*, Vol. 11, 79-107, GSLI University of Massachusetts.
- Hasegawa, Nobuko (1997) “A Copula-Based Analysis of Japanese Clefts: *Wa*-Cleft and *Ga*-Cleft,” *Researching and Verifying an Advanced Theory of Human Language: Report 1*, 15-38, Kanda University of International Studies.
- 長谷川信子 (2006) 「Sluicing and Truncated *Wh*-Questions」, 鈴木右文他(編)『言語科学の神髄を求めて』453-470, ひつじ書房, 東京.
- Hasegawa, Nobuko (2005) “EPP Materialized First, AGREE Later: *Wh*-Questions, Subjects, and *Mo* ‘also’,” *Scientific Approaches to Language* 4, 33-80, Center for Language Sciences, Kanda University of International Studies.
- Hiraiwa, Ken and Shinichiro Ishihara (2002) “Missing Links: Cleft, Sluicing, and “*no da*” Construction in Japanese,” *MIT Working Papers in Linguistics* 43: 35-54.
- Koizumi, Masatoshi (1995) *Phrase Structure in Minimalist Syntax*, Doctoral dissertation, MIT.
- Kuwabara, Kazuki (1996) “Multiple *Wh*-Phrases in Elliptical Clauses and Some Aspects of Clefts with Multiple Foci,” *Formal Approaches to Japanese Linguistics 2. MIT Working Papers in Linguistics* 29: 97-116.
- Lasnik, Howard (2001) “When Can You Save a Structure by Destroying it?,” *North East Linguistic Society* 31, 301-320.
- Merchant, Jason (2001) *The Syntax of Silence: Sluicing, Islands, and the Theory of Ellipsis*. Oxford University Press.
- Merchant, Jason (2006) “Sluicing,” *The Syntax Companion*, ed. by Martin Everaert and Henk van Riemsdijk, 269-289, Blackwell, London.
- Nishigauchi, Taisuke (1990) *Quantification in the Theory of Grammar*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Rizzi, Luigi (1997) “The Fine Structure of the Left Periphery,” *Elements of grammar: Handbook of generative syntax*, ed. by Liliane Haegeman, 281-331, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Ross, John R. (1969) “Guess Who?,” *Chicago Linguistic Society* 5, 252-286.
- Takahashi, Daiko (1994) “Sluicing in Japanese,” *Journal of East Asian Linguistics* 3, 265-300.

<hasegawa@kanda.kuis.ac.jp>